

世界真光文明教団・立春祭で

人類への警告と教示

震災地の組み手に義援金

世界真光文明教団（関口勝利教え主）は「神霊界の正月」を祝う恒例の立春祭を五日午前十時半から、静岡県田方郡中伊豆町冷川一五二四ノ四の「主座世界総本山御本殿」で挙行了した。関口教え主は全国から参集した「神組み手（信者）」に「愛と真で利他愛実践」を合言葉に真剣に精進努力するよう呼びかけ、兵庫の大震災を「神様が人類への警告として地獄の様相を型示しされたもの」との認識を示した。

立春祭の意義について、関口教え主は「天神第六代目の国万造主（くによろずつくりぬし）の大神様が森羅万象の霊成型（ひながた）を造り、それ以前の神々をお祀りした。人造りのみ祭りではなく、神様が神様を祀られた、神造りのみ祭りだ。太陽信仰から来ており、地球から見た太陽の道筋が三百十五度に傾く時で、今年は二月四日十六時十三分。だから五日に立春祭を執り行なった。大寒の最後の日の次の日から立春で、その前の日に節分の行事が行なわれている」と説明。

また「国万造主の大神様は第六次元の神霊界にお生まれになり、第五次元の神霊界まで降りてこられて、多くの神々の世界を支配する神様として活躍された。その国万造主の大神様が、いちばん現界に近い第五次元の大天底に、それ以前の神々を勧請して始められたみ祭りが、コノメ春立つの日のみ祭りだ」と述べ、「この神霊界のみ祭りを当教団だけが世界人類に先駆けて行なっている。神様のみに感謝申し上げるみ祭りであり、世界の平和は、この霊（ひ）の元つ国の霊界から浄まっていかなければならない」と重要性を説いている。

当日は前夜から降り始めた雪で聖地は一面が純白の世界となった。祭典は「愛と真で利他愛実践」をスローガンにして挙行され、二宮健親大祭委員長（西中京方面指導部長）の挨拶で始まった。大太鼓が連打される中を関口教え主が登壇。国内外から聖地に戻ってきた指導部旗・道場旗が続々と入場行進した。

式典は供饌の儀、関口教え主による「御親拝式典開始御奉告」並びに祭文奏上、さらに高井道博常務理事（渉外部長）の先達で「天津祈言」奏上、北海道方面指導部・清水栄子部長の先達で「伊都能売大国魂大国主祈言」奏上、青年部女子を代表して荒木憂子（宮城方面秋田お浄め所）、高橋あや子（信濃方面伊那旭中道場）、小島久美（北関西方面枚方中道場）、吉川知江（兵庫方面神戸小道場）、赤星幸子（西九州方面島原中道場）の五氏の先達で「神歌」奏上と続いた。

式典終了後、福岡方面小倉中道場の菊山貴子さんが登壇して「感謝御礼言上」を行なった。昭和五十七年五月に神組み手として許されたという菊山さんは、昭和六十年に自宅を「小倉お浄め所」として出発してから十一年目になる足跡を振り返り、夫の突然の幽界誕生（死）を乗り越えて神業奉仕を続けることができた喜びを語った。

この後、関口教え主が「教示」に立ち、神霊界の元旦を感謝の心で祝う立春祭の意義や、兵庫県南部地震が神による「ミソギハラヒ」であり、人類への「型示し」による警告であることなどを次のように話し、立春祭の奉納金から三百万円を神戸の組み手に見舞金として贈ると発表した。

「一月十七日にたいへんなミソギハラヒを受けた。組み手の中にも被災した方々がいらっしゃる。家を焼かれた人が二、三軒あるが、死傷者は一人もいなかった。やはり御守護があったということだ。教団では神戸がなかなか発展しないので、九月に男性の導士を派遣したところ、この方が救援に活躍されている。利他愛実践の姿だ。十七日の午前中に御神体は京都道場へ遷し、京都から水と食糧を神戸に運んだ。自転車かバイクで回るよう指示したところ、全組み手を回ってくれた。

昨年十二月に型示しの現象が出ている。八戸を中心に三陸はるか沖地震が発生した。その後に神戸で起きた。天

の岩戸が開いて、いよいよ正神がお出ましになったことを神様が地震をもって警告されている。全人類への警告として五千人もの命が召し上げられた。そして地獄の様相が型をもって示された。神様は人をして言わしめ、型をもって示す。このような形で神様のみに心を人類にわからせようとしている。

立春の意義も今まで通りではいけない。正神に本当にお仕えできるような神組み手として精進努力していかなければならない。水の時代が終わって、厳しい火の神がおいでになった。だから本当に真剣に精進を重ねないと組み手としても危ない。そういう型示しであることをしっかりと認識していただきたい。

火の洗礼が着々と進展している。今夏は水による災害も来る。去年は水不足だった。今年は火と水が十字に組んで来る。こういう中で、どうやって私たち神組み手が御守護をいただけるかという、いかに神様のみ役を果たしていくかにある。本当の利他愛を実践することが自分のためになることを神様はお示し下さっている。

生田神社はとうとう豆まきができないと報道されている。正神が天の岩戸に押し込められた時に、副神の神々が“煎り豆に花が咲くときに出てこい”と言った。煎り豆に花が咲くことはないから、出てこなくてもよいということだ。その正神が出てきたのだから、豆まきが許されないということだ。神戸の震災はいろいろなことを教えてくれている。

全人類の平和を願って、おお元の神様に感謝するのが立春のみ祭りだ。神様の経綸成就の信仰でなければならない。愛と真で利他愛実践していけば、まず自分のまわりから天国ができる。教線五倍加のためには、二代教え主様の言われたように、第一に日々新たなりで、一日々々を新たな思いをもって、神慣れしないことだ。二番目には行動力を強く打ち出していただきたい。いつでも、どこでも手をかざし、徹底して真吼えすることだ。三番目には、私は断じてあの人をお導きするという集中力が必要だ」

二宮大祭委員長から関口教え主に奉納の目録が手渡され、組み手を代表して東関東方面上野中道場の板谷紀子さんから関口教え主に花束が贈られた。この後、引き続いて直会が始まり、「利他愛」の実践者である宮澤賢治の作品とその理想をテーマにした奉納演芸「イーハトーヴ」が舞台で展開された。

全国から参集した組み手に手を振って応える関口教え主【写真は省略】

孝道教団

各組織が救援活動

募金活動やボランティア

兵庫県南部地震

「マイトリー（慈悲の心・思いやりの精神）運動」を標榜して、人類救済・社会浄化に立ち上がっている横浜の孝道教団（孝道山本仏殿＝岡野正貫統理）では、このたびの兵庫県南部地震の救援活動に各組織が立ち上がり、街頭募金活動に、救援物資輸送に、またボランティア活動にと素早い対応を見せた。

同教団では地震発生直後の一月十九日に、孝道山本仏殿名義で義援金五百万円を日本赤十字社に寄託したほか、翌二十日から三日間、孝道婦人会、壮年会、青年会、健児隊、マイトリー委員会の有志らが東急東横線東白楽駅前二カ所、ＪＲ東神奈川駅東口と西口、京浜急行仲木戸駅前二カ所などで募金活動を行なった。

また孝道山の山内にも募金箱を設置し、職員や参詣の信徒にも募金を呼び掛けた。

三日間で寄せられた街頭募金は百二十九万八千六十四円に上り、これに孝道山内募金の百一万九百五十一円、さらに孝道幼稚園の園児・父兄から寄せられた義援金七万八千八百七十円に、孝道山宝蔵大黒天讃仰会（会長＝岡野鄰子副統理）が同会役員の賛成を経て決定した義援金三百万円と役員有志からの二百万円を加えた合計七百四十万円余りが一月二十三日、同じく日本赤十字社に送られた。

これと並行して、東北別院をはじめ、静岡、青森、福島の教団各別院でも募金活動を展開し、寄せられた被災者救援金はそれぞれ、地元の公的機関に寄託され、被災地へ送られている。

また救援物資の方は、信徒に協力を呼び掛けたところ、今月五日までに新品の毛布、シーツ、タオルなどが大型段ボールで二百五十三箱も集まり、これらは順次、教団内のマイトリーセンターを通じて、横浜中央郵便局から神戸中央郵便局経由で、被災地へ送られた。

さらに、今月三日から五日まで、草野貞男法務部法務課長と福田友一マイトリー推進委員会委員長の二人が、教団として今後、どのような形でボランティア活動が可能か、あるいは協力できるかを視察するため、被災地を訪れており、この報告を待ってから、有志六人が現地に赴くという。

なお、孝道山内での募金活動は現在も継続中。